

生活の全てを懸けて挑んだ冬山登頂

# 独矢 山口 主将 記

山岳部 冬山合宿 12・19～26  
赤谷尾根・赤谷山往復

1年間の総決算・冬山合宿を見事登頂という形で終えた山岳部。名門復活へ向け、今回の登頂は大きな一歩となった。目標達成へ苦しみ抜いた1年を、当事者である矢口匠主将(文4)はどんな思いで歩んできたのか。そして本紙記者はどう見たのか。両者の視点から振り返る。



山岳部がほかの体育会と違う点は幾つかある。

- 1、合宿中(特に冬期)、ささいなミスで簡単に命を落とすこと。
- 2、人格形成の教育機関であること。
- 3、大学から登山を始め、努力次第で日本有数の登山家レベルになれること。

特に1においては、命を落とした責任は監督やコーチなどではなく、タレントに主将がかかることになる。これが山岳部の厳しさであり、大きな言い方であるが判断一つで危険にさらされる。行動中の命のリスクマネージメントこそが醍醐味である。

毎年、年間山行日数約90日余りを経て挑む冬山合宿を今年も剣岳周辺、赤谷山で行った。目標である剣岳周辺、赤谷山は世界でも有数の豪雪地帯であり、一晩で積雪が15、20cmになることも珍しくない。ひとたび寒波にみまわれると1週間近く暴風雪にさらされ、500m歩きの5時間以上かかることもある。過去には昭和36年豪雪や昭和56年豪雪、平成18年豪雪など、積雪に阻まれ行動できずパーティー(登山隊)全員が凍死したこともある山域である。

危険な冬山決算合宿に挑戦するため、今年度はさまざまな事を取り組んだ。新人合宿では2年ぶりに白馬三山を登頂し、上級生隊も2年ぶりに白馬主稜到達に成功。夏山合宿では登攀(とろはん)力を強化するため標高差600mの北岳バットレスを登攀し、体力強化のため約50kgの重荷を背負って南アルプス全長100kmを踏破。冬富士合宿では気温マイナス11度の気象条件の中、全員での頂上アタックに成功した。またトレーニングにも力を入れ、学生部主催、関東圏内大学対抗伝大会ではライバル・早大、法大、東農大を抑え優勝し連覇することができた。

今年度は合宿や強化山行も含め、生活すべてにおいて赤谷山登頂成功を目指し、全員一丸となって活動した。結果、赤谷山に全員で登頂することができ、下級生もこの合宿成功に自信を持った。斜陽と言われて久しいわが山岳部であるが、今年度の活動によって確実に力を付け、来年度以降名門山岳部の復活をスローガンに、強い明治の復活を目標に活動していく。

◆矢口匠 やぐちたくみ 文4 宇都宮白楊高出 173cm・65kg



登頂成功に満面の笑みを見せる矢口主将。切り込み写真は山頂で部旗を広げる部員たち<写真提供・山岳部>

## 名門復活へひた走った1年間

### 記者の目「自ら追い込むことの大切さ」

自ら掲げた目標に向け、妥協することなく努力を重ねてきた部員たち。私は今年、そんな彼らに圧倒されっぱなしだった。「何としてもかつての姿を取り戻すため、今年はず

点は、生活面においても一切妥協を許さないとこころだ。目標達成のためには1日も努力を怠らない。そんな彼らならきっと冬山登頂を果たせる――。私は安心して見送った。

そしてついに念願の冬山登頂を達成。生還を果たした彼らは誇らしげに微笑んでいた。苦しみ抜いたこの1年間は報われたのだ。私は部員たちの姿に教えられた。夢に向かって一生懸命自分を追い込むことの大切さと、その先にある感動を。そして部にとって

も、名門復活へ向け大きな意味を持つ1年となったはずだ。【田澤美雪】